広報きゃんせ長浜
平成19年 7月号

Contents

■特集　多文化共生　2～5P
■基本構想を策定しました　6～7P
■6月市議会から　8～9P
■参議院議員通常選挙　10P
■税の減額措置、住宅改修奨励金　11P
■ほっとにゅーす、よい歯のコンクール　12P
■ぶらりわがまち(大通寺)　13P
■地域づくり、子育て支援、市職員募集　14P
■ごみゼロリーダー、長浜環境塾　15P
■人権ってなあに、社会を明るくする運動　16P
■高齢者関連のお知らせ　17P
■国民年金、国民健康保険、1000人献血　18P
■お元気ですか(デジタル画像透視撮影装置)　19P
■湖北オーケストラ募集、パソコン講習　20P
■文スポチャンネル(プールオープン)　21P
■インフォメーション　22～23P
■裏表紙　灯りの森2007　24P

今月の表紙

6月17日（日）、錦織町地先にある㈱ヤンマーのグランドで開催された「湖北リーグ」の試合の一場面。

現在、12チームが登録されている湖北リーグでも、最近は外国人選手がいるチームが増えており、3年前には外国人だけのチームもできたそうです。

「最初は考え方や言葉が違うため、もめたこともありましたが、試合をするうちにだんだんと慣れ、少しずつお互いのことがわかってきました。」とFCアヴァンツァーレ代表の村崎陽一さん。

外国人も日本人もみんな同じ人間です。言葉は通じなくても、一つのことを一緒にやることで通じ合うことができるのではないでしょうか。

一つのボールを追う選手たちの姿を見ながら、そう感じました。

特集

多文化共生

～みんなが地球市民として共生できる暮らしを考える～

市内にはたくさんの外国人が住んでいますが、言葉の壁や文化・習慣、生活上のルールの違いにより、地域社会にとけ込めていない状況があります。

しかし、地域の中ではそれを乗り越えようとするいろいろな活動が始まっています。今回の特集では、そのような活動や市の取り組みを紹介しながら、国籍や文化の異なる市民が共に快適に暮らすために「多文化共生」をどのように進めていけばよいのかについて考えます。

※「多文化共生」・・・国籍や民族など異なる人々が、互いの文化的違いを認め合い、対等な関係を築きながら、地域社会の構成員として共に生きていくこと

5月27日(日)に豊公園で開催された「ナガハマ・インターナショナル・フェスタ」。市民団体が中心となって、地域の人と外国人住民との交流のきっかけにと市内で初めて行われました。今後は、こういった取り組みがもっと増えていけばいいですね。

地域で見つけたつながり

外国人と日本人がともに暮らしていく上では、いろいろな交流を通して、お互いを理解することが大切になってきます。ここでは、ともに活動をしたり、暮らしたりしている外国人や日本人のみなさんにそのきっかけやポイントをお聞きしました。

《共通の趣味がサッカー》

村崎（むらさき）　陽一（よういち）さん（新庄寺町）

僕のチームに外国人が加わったのは、職場で一緒だった外国人の同僚とコミュニケーションをとろうとサッカーに誘ったのが始まりでした。一緒にできる何かがあれば言葉がわからなくてもコミュニケーションはとれるし、そこから広がっていくと思いますよ。

《飛び込んでいくことが近道》

呉屋（ごや）　良寛（よしひろ）さん（十里町）　ペルー出身

日本に来た時も、英語を勉強するため留学した時も、遊びやサッカーを通じて、みんなの中に飛び込んでいきました。そのためか、ほかの人より早く言葉が覚えられたように思います。ちょっと勇気がいりますが、話ができるようになると交流もしやすくなり、まわりの対応も変わってきますよ。

《構えないことが一番》

勝木（かつき）　太美雄（たみお）さん（大浜町）

誰でも、知らない人や慣れないことにはどうしても身構えてしまいます。お互いがそうなってしまうとなかなかうち解けられないので、普段通りに接するようにしています。言葉が通じなくてもあまり気にせず、いつものように生活をしていくのが、いいのではないでしょうか。

（今年も富田人形の留学生を受け入れ中）

《日本語を覚えて話そう》

ジアーナ・ミールトンさん（神照町）　ブラジル出身

知り合いを通じて畑を借り、いろいろな野菜を作っています。畑では、隣の人と野菜や料理などの話をしながら、週末を楽しんでいます。それができるのも日本語教室などに通い、日本語を勉強してきたからです。まだまだうまく話せませんが、コミュニケーションをとるためには、まずは日本語を覚えて、話すことが大切だと思います。

《お互いの文化を大切に》

内藤（ないとう）　方千（まさこ）さん（小堀町）

私の開発した、やさしく楽しいお琴「ドレミ・ポップコーン」で湖北を中心に、多くの仲間が、世界の音楽を楽しんでいます。音楽とは音を楽しむと書きます。また、琴の音は「琴線にふれる」というように日本を象徴する音色です。さまざまな国の人と演奏する時、相互の文化や個性の違いを認めてこそ、すばらしい調和が生まれ日本の個性が光るのです。それが、このお琴の醍醐味です。これからも、長浜から、世界に向けて仲間を募り、音楽交流の輪を広げていきたいと思います。